

若し此條に候はんには、恐れある申事に候へども、殿の御誤りなきにしもあらず、略○中康政重て申けるは、また上田の城を攻め給はざりしは、古い者共が、強ちに諫め止めまゐらせし故なりき、中納言殿には、攻破つて御通り有べしと、御諛ありしかど、年老たる輩を附け參らせられし事は、諫をも進め謀をも獻れとの御事に候、たとへ御心に叶はせ玉はぬ事なりとも、我等が諫に従はせ給はんが、大殿の御心に任せらるゝにあらずやと、申ける上は、御心にも任せ給はず、されば彼城を攻めう攻めじの争ひにも、目をこそ移し候ひつれ、それ父子の御中にて、わたらせ給へば、凡の事の御教訓には、如何ほどの御勘氣も、など無からざらん、御年も壯にならせ玉ふ御子の、行末は天下の事をも知召さるべきを、弓矢取ての道に、父の御心に叶はせ給はざりしと、人の侮り申さんは、御子の恥辱のみにあらず、父の御身にも、如何でかその嘲りを免かれさせ玉ふべき、これ程の御遠慮ましまさぬこそうたてけれと、涙を流し諫め奉れば、徳川殿御心とけて、明れば九月廿五日、伏見の御城にて御對面、在て、海道の軍のやうを御物語あり、山道の事をも問せ玉ひしかば、中納言殿みづから御筆を染られ、康政が此度の心ざし、我が家の有らん限りは、子々孫々に至るまで、忘るゝ事あるまじき由の御書を給はりしとぞ聞えたる、

〔常山紀談二十〕

台徳院殿

○徳川秀忠

諸大名をめし、土井大炊頭利勝をもて、來年嗣君に世を譲らせ給

ふべき旨、仰出されしかば、皆祝し奉りたる處に、井伊直孝默然として有しかば、利勝かたへに招き、いかなる事ぞと問に、天下亂の本たりと存ずれば、目出度事とは存もよらずと申す、子細はいかにと問ふ、されば其事に候、大坂の亂幾程なく、江戸石壁のいとなみ、日光の土木、天下の諸大名、以の外に困窮せり、又世を譲らせ給ひなば、諸大名獻上奉る物に費多く、將軍宣下の饗禮を取行ふべし、愈困窮に及び、下を剝、民を苦むるの外、更にせん方なからん、是民のなげき、亂のもと、存るなりと、申されしかば、利勝尤なり、此旨ありのまゝ、申べしとて、直孝を御次の間にともなひ、利